

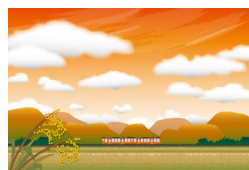
ねがいのいえニュース 第61号

生活支援ハウスねがいのいえ広報紙・2021年10月15日発行

発行責任者：藤本真二 〒331-0071 さいたま市西区高木185-29

Tel (048) 626-1909 Fax (048) 626-1920

E-mail negainoie@r6.dion.ne.jp Hp <http://www.negainoie.com>



相変わらず感染に翻弄される日々ですが、みなさまお元気ですか？感染減少とともに各地で制限が緩められる中、人々の気持ちは楽になるのか、やはり警戒を緩められないのか、それさえまだわからないことだらけです。幸いねがいのいえはひとりの陽性者も出さずに営業してまいりましたが、ここへきて近隣の施設での感染が多発し、そちらと併用する方がこちらの利用もできなくなるという事態が相次ぎ、ついに大幅な減収に転じたこの2ヶ月でした。

「社会福祉法人ねがいのいえ」設立へ

昨年夏の申請から1年間の審査を受けていたグループホーム建設の補助金が受諾されたと7月末に連絡が届きました。来春オープンに向けて今はあわただしく準備に追われています。同時に社会福祉法人の設立も決まり、9月にさいたま市の認証を受け、10月に登記の運びとなりました。今年度中に現在おこなっている事業をすべて「NPO 法人ねがいのいえ」から「社会福祉法人ねがいのいえ」へ移行することになります。

長い年月を経て、うまくいかないことも多々あり、現在も至らないところが多い私たちですが、これからは公益性の高い法人として認可される責任を認識し、地域に貢献できる団体になっていきたいと思えます。また、今回特別なご配慮をいただいたさいたま市の担当者のみなさまへ厚く感謝を申し上げます。

これからの計画

ねがいのいえはこれまで、子どもの頃に出会った利用者のみなさまへ、その成長に沿って必要な支援を創出してきました。そして今後、みなさまが生まれ育った街で暮らしていけるよう50人のグループホームを整えることを約束しています。

現在2軒のホームで15人が暮らしていますが、来年度新たに15人、2軒のホームがオープンします。そして今後5年以内に目標である50人を達成する計画です。

同時に、急増中の医療的ケア児や行動障害の児童に早期からの療育を提供するため、総合児童センターの建設、そして重心対応の生活介護の整備、またいずれは障害者専門のクリニックと医療型短期入所と、地域が必要としている課題をひとつひとつ実現していく計画です。その

想いは新たにスタートする「社会福祉法人ねがいのいえ」が引き継いでいきます。

強度行動障害でお困りの方へ

理事長の著作「行動障害が穏やかになる心のケア」を読んでいただいた方から寄せられる相談が増えてきました。放課後デイや生活介護等にお勤めの職員や、我が子の行動に悩む親御さんたちです。心ある職員は、現場の管理者も同僚も利用者との関わり方を知らず学ぶ意欲も乏しい中、虐待まがいの対応が続き行動障害が悪化していくばかりの毎日に心も体も疲弊していきます。悩んでいる親御さんたちも同様に、通っている施設の理解が得られない、職員が対応方法をわかっていないようだと言われます。

どの相談もねがいのいえのスタッフなら対処できるのだがと思いつつも、取り組んでいただくのはその方に関わっている施設職員やご家族自身であり、悩めるみなさまが自分たちでできる対処法を伝えなければなりません。そんな時には「心のケア」の研修を受けていただくことを提案しています。こちらの主催する日に参加していただくことも可能だし、職員の方に集まっていただきこちらから出張して実施することも可能です。

しかし先日相談された親御さんは、職員さんたちに呼びかけたがその研修を受けてくれる人が集まらなかったということがありました。目の前に苦しんでいる利用者がいて、その方に少しでもできることを学びたいという意欲のある職員がいないという現実是最も困難を極めるケースと言えます。逆に、その時に数人の支援者が集まってくれるコミュニティなら、その問題はほぼ解決すると約束できます。

緊急事態宣言が続く中、遠方から研修に来ることもできなかった相談者が、電話とメールの助言のみで困難な行動障害を解決したケースを紹介したいと思います。

地方の生活介護で勤務するSさんは業界未経験で入職した男性。現場では数人の利用者を先輩と2人で支援するグループに所属しているが、まだ経験が浅いSさんは先輩の指導を受けながら従事している。

利用者のうち1人の男性がパニックを起こす方で、物を壊すなど粗暴な行動が繰り返されるが、先輩からは対応は見守ることだと言われ、特にそれ以上の対策もないまま改善しない。内心、何も為すべがないのではないかと感じているが、現場での立場が低いSさんの意見は聞き入れてもらえず、先輩のいうことを聞いていけばいいのだと言われた。

その他いくつかの問題点があった。

家庭では夜不眠が常態化してご家族が疲弊している。

トイレのあと手を洗う習慣が身につけていないため手洗いを促されると怒ってパニックになる。コロナ禍では手洗いは必須であるためトイレのたびにこのバトルが起きる。

皮膚状態が悪くかなり痒みがつらい様子で、それもパニックの一因ではないかと思われるが、家族が受診の必要性を理解せず、通院をお願いしても拒否される。施設の上司からは「家族の



意思を尊重しなければならない」と言われたが、Sさんは「最優先されるべきなのは本人の苦しみの緩和ではないか」と納得できない。

八方塞がりの環境の中でこちらに相談が寄せられたのは今年2月のことだった。「行動障害が穏やかになる心のケア」を読み、自分の考えは間違っていなかったのだとわかり涙したと言われた。

まず最初に、日々の生活は楽しく充実しているかどうか質問した。楽しくもない活動を無理やり強制されてもストレスが積もるばかりで、満足感を伴う心地よい疲れがなければ夜は当然眠れなくなるし、活動中ウトウトすることになるのも無理はないでしょうと伝えた。

そして、他人に迷惑をかけること、自分の体を傷つけることはしっかりと止めていきましょう、と助言した。止めるとは強い力で抑圧することではなくほどほどの力で張り合うやりとりである。本来研修の場で実技を通して学んでいただくことだが、コロナ禍で実際にお会いできない今の状況の中で、できる限りわかりやすく説明するのが現実の精一杯だった。

しかし十分に受け止めたSさんはできることをひとつひとつ実践していった。ほどなくして、Sさんの見ている場面では粗暴な行動がなくなっていった。通院がかなわない中、アトピーに関する文献を読破し、痒そうな箇所を冷やす対処を丁寧におこなった。やがて彼がSさんに初めて笑顔を見せた。2人の間に信頼関係が生まれた瞬間だったと言っていい。

初めて相談を受けた日から半年ほど経ち、毎日通う活動の場所に、安心できる職員、心を支えてくれる存在がいてくれる今、問題行動と呼ばれる行為はほとんど消失した。

後日Sさんからメールが届いた。

「いつもありがとうございます。まだまだ勉強不足ですが、あのあと色々なことがありそのことも関係性が良くなったひとつの理由であったかもしれません。ひとつ言えることは本気でその利用者さんのことを思い関わっていれば伝わるのだと思いました。やはり一番大切なのは思いであると感じました。」

コロナで大変な日々が続いておりますが本当に藤本様はじめ利用者様、職員の皆様、どうかお元気に無事に日々過ごされますこと心から祈っております。11月研修に参加できること願っております。ありがとうございました。」

国が推奨する行動障害研修を受けても改善しないと訴え多くの方がねがいのいえの研修にやって来る。国のその研修プログラムの良いところも活用し、さらに足りないところを追加する形で、今後ねがいのいえも行動障害研修をおこなっていきます。その新しいチャレンジは来年3月に始まります。

11月の基礎研修は通常通りのプログラムで行います。定員はまだ空いています。緊急事態宣



言も明けましたので、遠方の方もぜひご参加お待ちしております。

ゆづちゃん

多田 彩華

小学5年生のゆづちゃんは就学前から児童デイサービスを利用してきた。小さい頃から偏食傾向があり、食べられるものと飲めるものが限られていた。これまでの利用時も食べたり飲んだりすることはほとんどなく、年齢とともにその傾向は強くなり、泣くことも多かった。

最近では学校に迎えに行ったときに昇降口から車まで歩こうとせず、スタッフが抱っこして移動することも多かった。

ある日、自分の足でしっかり歩き、学校の先生にも歩いていることを褒められた。放課後デイに到着した時に歩きたくないと主張したが、車から建物まで頑張って歩くよう促した。建物に入ったところで泣き始め、約30分泣き続けたところで個室に移動する。

まずは声かけをしながら体のやりとりを行う。“理解してほしい”という言葉に反応を示していた。次に、リラックスを促す姿勢に替え呼吸法を試みる。“理解してほしい”という彼女の気持ちを受け止めつつ、「ゆづちゃんが乗り越えられるように、応援するしお手伝いするからね」と伝える。

5分ほど続けたところで、ゆづちゃんの体が前に上がった。その機を逃さず活動に戻ることを提案すると、自らの足で、みんなが活動する場に戻ることができた。その後は少し甘える姿もあったが、笑顔が戻り楽しそうに活動に参加していた。



別の日、昼食介助に入った。ゆづちゃんにとって、デイサービス利用中、食事の時間が何よりも辛いようで泣き方もとても強い。持参のお弁当の中身は白米とハンバーグ。一さじ、口に入れる度に口元でのやりとりを行う。一口飲みこむまでに5分程かかる。白米2口、ハンバーグ1口食べたところで、自らテーブルを離れた。普段のやりとりが3口で終わりにしていたため、3口食べたところで見切りをつけたのだろう。

小学5年生よりは心身ともに幼く感じられるゆづちゃんだったが、本当はしっかり理解していて、頑張ろうとする気持ちもしっかり持っていることが改めてわかるエピソードだった。

別れゆくスタッフへ

9月、心優しい常勤スタッフがねがいのいえを去ることになりました。それは、業務や現場に不満があったのではなく、やむを得ない本人の事情があったからです。スタッフひとりひとりの想いもいつも大切にしてきた私たちは、悲しみを飲み込んで笑顔で送り出すのみです。

人一倍の苦勞を背負って生きてきたスタッフは深い思いやりが溢れ出る人でした。自分に厳しく生きてきた人が私たちにもっと甘えて頼ることを自分に許せたら、長く勤めることができたのかもしれない。

過去にやむを得ない事情で去って行った全ての仲間が、また一緒に働きたいと言っていつでも戻って来られるように、ねがいのいえはこれからもみんなの心の居場所であり続けたいと思います。